

# 教員を目指す学生向けの短期海外研修プログラムの開発 ーオーストラリア小学校インターンシップ研修の実施とその課題ー

高橋 亜紀子

## 1. はじめに

宮城教育大学は平成 22 年 1 月現在、韓国、中国、アメリカ、オーストラリア、イタリア、イギリスの 6 カ国、7 つの大学と学術交流協定を締結している。この交流協定を利用し、半年から 1 年間の長期派遣留学をする学生数は、毎年 1～2 名である。一方、長期休暇中に参加できる短期派遣留学（イタリア、アメリカ）を希望する学生は年々増加しているが、派遣枠が 6～7 名ほどに限られているため、参加したくても参加できない学生のほうが圧倒的に多いのが現状である。

平成 19 年度の学部改編により、本学に所属するすべての学生に教員免許状の習得が義務付けられることになり、カリキュラムが大きく変更になった。これまでは、長期派遣留学をする学生は、いわゆるゼロ免課程の学生であり、今後、留学希望者が減ることが懸念される。その理由としては、2 点が考えられる。1 点目は、教育実習に関連する科目を全学年で取得しなければならなくなったため、免許を取って 4 年間で卒業することはほぼ不可能という点である。2 点目は、外国語科目として「英語」のみが必修科目となり、これまで開講されていた英語以外の外国語を学ぶ機会がなくなってしまった点である。これにより、英語圏以外の国に目を向ける学生が減ってしまうのではないだろうか。

しかし、学生時代に一度海外へ行っておきたい、長期休暇中に参加できるプログラムがあれば参加したいなど、学生には海外研修への潜在的なニーズがある。既存のものとしては、先に述べた短期派遣留学と全学対象の「海外総合演習」（オーストラリア・中国）との 2 つしかない。そこで、国際理解教育研究センターでは、学生のニーズを満たすべく、長期休暇を利用して参加できる短期海外研修プログラムの開発を検討することにした。

本稿では、昨年度に企画・実施した短期研修プログラム「小学校インターンシップ研修」について報告を行う。企画及び実施は、筆者と英語教育講座の佐々木とが担当した。

## 2. 研修の目的

ここでは、オーストラリア小学校インターンシップ研修の開発目的を述べる。

2008 年 12 月末現在、日本での外国人登録者数は、220 万人を越え、日本の総人口の 1.74% を占め、過去最高を更新している。少子高齢化やグローバル化により、外国人の人材受け入れも活発化しており、それに伴い、学校現場でも外国にルーツを持つ子どもたちが増加している。

一方、平成 23 年度から、小学校でも英語教育を中心とした外国語活動が必修となる。文部科学省によれば、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化につ

いて体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行うという。

現在、学校を取り巻く環境は多様化しており、多言語化・多文化化が進む学校も出てきている。本学の学生は教職に就くものが多い。学生のうちに外国語を学ぶことを通して異文化に興味を持ち、海外で現地の人々と実際にコミュニケーションをするという経験をすることは、将来、教員になったときに必ず役に立つのではないだろうか。そこで、教員を目指す学生のために、英語も学べるオーストラリアで、異文化体験と学校現場での体験を組み合わせた海外研修プログラムを開発することにした。

### **3. 研修の概要**

#### **3. 1. 研修のねらい**

研修地には、英語圏でなおかつ多文化社会であるオーストラリアを選択した。オーストラリアでは、多言語教育政策 (LOTE) がとられており、小学生にも英語以外の外国語学習が義務付けられている。選択できる外国語のうち、日本語は最も学習者が多いが、日本語を教える教員は不足しているという。そのため、現地の学校では日本人を積極的に受け入れ、日本語や日本文化を教えてもらうという活動が行われている。こうしたプログラムを参考にし、現地の小学校での教育実習、ホームステイによる異文化体験を研修に盛り込むことにした。

本研修のねらいは、以下の2つである。

- (1) 本学の学生が、オーストラリアの小学校で教育のあり方について学ぶとともに、ボランティアスタッフとして日本語教育を支援する。
- (2) 将来、教師として、学校現場で異文化理解や国際交流の重要性を子どもたちに指導する際にこの経験を役立てる。

研修期間は、事前研修・2週間の教育実習・事後研修の計3週間強とした。企画及び実施にあたっては、実習校の手配や現地でのサポートなどを考慮し、現地の教育関連会社「オーストラリア教育ネットワーク (JAPAN AUSTRALIA EDUCATION NETWORK)」(代表、佐藤純子氏) に協力を要請した。また、航空券やビザ、ホテルの手配等については、オーストラリアでのサポートも充実している国内の旅行会社に手配を依頼した。なお、企画は5月に開始し、8月に佐藤氏とともにプログラムの検討会を持ち、9月には旅行会社に手配した。

#### **3. 2. 研修の内容**

本研修は、(1)～(3)の内容で構成される。

- (1) 事前研修 (3日間) : オーストラリアの教育の特色の理解、実習準備 (模擬授業など)
- (2) 現地小学校教育実習 (2週間)
- (3) 事後研修 (3日間) : 教育実習で学んだことの振り返り

なお、事前及び事後研修は、オーストラリア・シドニー市、現地小学校での教育実習はニューサウスウェールズ州及びビクトリア州の小学校で実施した。

### **3. 3. 参加者の募集と広報**

研修を実施するにあたって、まず、10月半ばにポスターによる広報と説明会を2回（11月5日、12日）行なった。説明会では、研修の概要（日程、内容、旅費、参加資格等）を学生に説明した。参加資格は、オーストラリアの現地小学校で教育実習が円滑に行えるように、英検2級またはTOEIC500点以上の英語力があることが望ましいとした。あわせて、意欲や積極性があるかどうかも重視することにした。

次に、応募にあたっては、申請用紙に英語力や渡航経験、志望動機（英語及び日本語）を記入してもらった。今回は6名の応募があり、英語力が若干不足している学生もいたが、初めて企画したということもあり、全員の参加を決めた（11月26日）。

そして、オリエンテーションの1回目（12月9日）では、研修のしおりに基づき、日程と内容、参加費用の支払い方法、研修前の課題（教案作成）について説明した。続いて、旅行会社からは、航空券や海外旅行保険、ビザ取得などの詳しい説明があった。海外が初めての参加者に対しては、パスポートの取得方法、出発までの諸注意などを詳しく説明した。出発直前の2回目のオリエンテーション（2月20日）では、入国書類の説明やホームステイ、実習校などの説明を行った。2回のオリエンテーションの合間には、実習校やホームステイ先の情報、準備しておくことなどについて参加者とはメールで連絡を取った。

参加者は、出発直前にキャンセルしたものが1名いたため、実際は5名となった。

### **3. 4. 研修の費用**

研修費用は、日本からオーストラリアまでの旅費及び事前・事後研修のホテル滞在費が約30万、事前・事後研修及び実習・ホームステイ費用が約10万で、合計40万程度であった。

### **3. 5. 研修日程と引率**

研修は、2月24日（火）～3月19日（木）までの24日間である。航空会社は、カンタス航空で、成田ーシドニーの直行便を利用した。研修を円滑に行うと同時に、学生のサポート、現地での実習校訪問のために、前半を筆者が、後半を佐々木が引率した。筆者が2校、佐々木が3校を巡回指導した。

## **4. 現地での研修**

### **4. 1. 事前研修**

事前研修は、現地到着の2月25日（水）～27日（金）の3日間行った。場所はシドニー市内である。内容は、参加者の自己紹介、オーストラリア関連情報、オーストラリアの教育制度、オーストラリアの日本語教育、ホームステイ、オーストラリア英語と文化、模擬授業とディスカッション、インターン経験者の体験談、オーストラリアの子ども、インターンの活動内容・期待されていること、などである。研修は、オーストラリア教育ネットワークの佐藤氏及び英語教師が担当し、筆者は学生のサポートを行なった。

緊張した面持ちでのスタートとなった。しかし、研修が進むにつれ、参加者同士も打ち解け、お互いに刺激をうけながら積極的に学ぼうとする姿勢が見られるようになった。ホームステイが一番の不安要素であったようだが、経験者の話を聞くことで、不安が解消され、出発への心の準備もできたようである。

#### 4. 2. 現地小学校での教育実習

教育実習は、表1に示す4つの学校で行った。1校にだけ2名を派遣した。

表1 実習校のリスト

	学校名	学生数	所在地	派遣数
1	ALL SAINTS' COLLEGE (私立幼小中高一貫校)	650名	Bathurst, NSW2795	2
2	NORTHBRIDGE PUBLIC SCHOOL (公立小学校)	480名	Northbridge, NSW2063	1
3	MANCHESTER PRIMARY SCHOOL (公立小学校)	300名	Mooroolbark, VIC3138	1
4	BALD BLAIR PUBLIC SCHOOL (公立小学校)	24名	Guyra, NSW2365	1

参加者は、学校の事情に合わせて、日本語教員のアシスタントや日本語・日本文化の授業、日本語以外の授業の見学、アシスタント、放課後の活動への参加などを行なった。

#### 4. 3. 事後研修

事前研修は、現地到着の3月16日(月)～18日(水)の3日間行った。場所はシドニー市内である。内容は、実習の振り返り、ディスカッション、プレゼンテーション、まとめ、である。研修は、佐藤氏が担当し、佐々木はサポートを行なった。

教育実習でそれぞれが学んだことを全員で共有し、最後に研修の成果を発表した。

### 5. 参加者が学んだこと

#### 5. 1. 参加者

研修に参加した5名は、表2の通りである。

表2 参加者のプロフィール

参加者	性	学年	コース・専攻	海外渡航歴	教員志望	英語力
A	男	1	小学校 英語コミュニケーション	幼少期3年	未定	TOEIC530
B	男	1		なし	小学校	TOEIC500
C	女	1		なし	小学校	英検2級
D	男	2	小学校・社会	オーストラリア 7週間等	小学校	英検2級
E	女	特別 専攻科	病弱教育専攻	インドネシア2年等 (日本人学校教員)	小学校	

## 5. 2. 事前研修後のアンケートから分かったこと

事前研修で学んだことを整理するとともに、実習の目標を設定してもらうために、事前研修終了時に参加者にアンケートを実施した。ここでは、2つの質問（Q1、Q2）を取り上げ、参加者の回答をそれぞれ表3、4に示す。

表3 Q1「終了時にどんなことを学んでいたい」の回答

参加者	回 答
A	実際に自分の身を異文化の環境に置くことができ、今よりもっと異文化を理解することができると思うので、沢山色々なことを体験して、様々なことを学びたいと思う。英語を使わなければいけない状況の中で挑戦心を忘れずに積極的にコミュニケーションをとる事で英語力を高めたい。言葉が通じても通じなくても、生活をする上で相手を理解して気遣うことは大事だと思うので、今までとは違う環境の中で、そういう力を身につけたいと思う。
B	将来小学校教諭になる目標を持ち、このインターンシップに参加した。日本の小学校で働くにあたってオーストラリアの教育について学ぶことはとても大切だと思う。日本との違い、また、日本とは雰囲気が違う教室の風景を目に焼き付け、そして研修で学んだことを全て確認したい。日本には触れることの少ないネイティブの英語。English only の環境にどっぷりと浸かることで、Writing の力というより、むしろ Speaking の力をのばしたい。
C	オーストラリアの学校の子どもの様子を聞いて、自主性、積極性が日本よりずっとあると思った。実際に自分で見て、やってみて触れてみて、違いを知りたい。オーストラリアの授業は思考力を高めることに重点を置いているという。私が考えている教育の理想像に近いと驚いた。特に興味深かったのは、子ども達で小さなコミュニティをつくる活動だ。自分で知りたい、やりたい事をとことん調べてみる、自分の職業になりきる、お金を動かしている。机に座って話を聞いているだけでは分からないことが見えてくると思う。派遣先でそれをやっていなくても、通じる何かが見られるのではないかなと思う。先生の子ども達に対する接し方も学びたい。自主性を育てるためにどう接しているのかを見てきたいと思う。
D	教育現場の様子、授業の組み立て方、子どもに授業する上で必要なこと オーストラリアならではの会話・オーグスラング、シドニーとアーミデールの違い（良いところ、不便なところ）、 田舎での暮らし、異文化（衣食住）、暗黙のマナー、コミュニケーション、即答力、行動力、多面的な見方、言葉を超えた枠・つながり、日本という国（改めて学ぶことがあるとあると思うので）、写真を撮る技術
E	日本でもオーストラリアでも共通して言える子どもが成長していく際に必要な教師のあり方を学んでいたい。例えば、教師の子どもへの姿勢・声かけ等。英語力を高めたい。決まったフレーズがワードでいいので子どもとホストファミリーとコミュニケーションをより密にしたいと思った時に調べ、1日少しずついいので英語力を高めたい。オーストラリアの教育と日本の教育について比べ、良い所を言うように学んでいたい。良い所は日本で活かしていきたい。日本とオーストラリアの生活文化の違いを学び、日本で教員になった際に総合的な時間やこれから始まる英語科の授業で学校でリーダーシップをとり、カリキュラム等を作成出来る様に学びたい。

表3に示したQ1の回答を見ると、英語力の向上はもちろんだが、日本とオーストラリアの教育の相違点（教師のあり方、子どもたちの自主性や積極性の育て方、授業方法）に非常に関心が高く、学びたいという意欲が感じられる。また、異文化や相手を理解する心、多面的な見方、コミュニケーション、行動力なども身につけたいと考えていることが分かる。

表4 Q2「終了時に精神面でどんなことを学んでいきたいか」の回答

参加者	回 答
A	見知らぬ場所で見知らぬ人と過ごすには、適応する力が必要だと思うので日本的な文化の長所を守りつつも、オーストラリアの文化の積極性や大らかさなど、良い面を身につけたいと思う。今回の研修で様々なことを体験することによって自信をもって行動出来る様になりたいと思う。
B	今回のオーストラリア研修は、初海外。初研修なので少し不安がある。異国の地で、初めて会う家族と2週間となると不安が今のところかなりあるが、これは日本には絶対に出来ない体験であり、とても貴重な。たしかに不安はあるが、これに打ち勝ち、2週間がんばり、新しい環境に対する適応力、そして、挑戦する姿勢が身につけてくれればいいと思う。「自分は異国の地で、ホームステイ2週間教育実習した!!」という自信を帰国後に抱けるよう、精一杯やってみる。成せば成るの精神を忘れずに頑張りたい。
C	私の課題は積極性だ。積極的にいっても良い場面でも「私はいいや…」と思ったり、遠慮したりしてしまいがちな所がある。ホームステイ先でも学校でも自分から心を開くこと！自分から動くこと！待っていないこと！を心にいつも留めておいて2週間を楽しみたい。英語でのコミュニケーションをするときに失敗を恐れない。文法なんて気にしないで、伝えようとする姿勢を大事にしていきたい。身振り手振り、単語、字で何とかしようと思う。
D	子どもの発言（乱発）に屈しない精神、言語と子どものダブルパンチにも余裕の強い精神、YES・NOをはっきり言えるようにする／またYESと言う機会が増えるようにする、前向きな心、寛大で穏やかな心、向上心、柔軟性
E	言葉が通じなくても積極的にコミュニケーションを取る姿勢、日本とは違う文化、価値観を受け入れ素敵だと思える広い心、どんな子どもどんな人も受け入れ、相手が何を望んでいるのかを考え行動する姿勢、どんなことにもチャレンジして成功しても失敗してもそこから様々なことを学んでいこうとし続ける姿勢

表4に示したQ2の回答からは、2週間の実習やホームステイを通して、新しい環境への適応力と柔軟性、失敗を恐れない積極性を身につけ、自分でやり遂げたという自信を持ちたいと望んでいることが分かる。

### 5. 3. 事後研修後のアンケートから分かったこと

事後研修終了時にも、研修全体を通して学んだことについてのアンケートを実施した。ここでは、4つの質問（Q3～Q6）を取り上げ、参加者の回答をそれぞれ表5～8に示す。

表5 Q3「オーストラリアの小学校教育について学んだこと」の回答

参加者	回 答
A	研修に参加する前に考えていたよりも、大きく日本の小学校教育と違って驚いた。実際に学校へ行くと学校の様子が全く違って、事前研修で学んだことを体験することができた。日本と比べるとオーストラリアの教育は生徒も先生も自由で、主体性というものが全体として重要視されていて、その良い面を実習を通してとても感じることはできたが、悪い面もないわけではないことも感じた。日本とオーストラリアの教育は対比関係のようで、カリキュラムの違いなど大きな違いがあるが、まだどちらが良いかは決めることが出来ない。1つ言えるのは、どちらが一方に偏るのは良くなく、両方の良い面を上手く取り入れられるような良いバランスが必要なかなと思った。

B	<p>オーストラリアの小学校で2週間実習をして感じたことは、授業展開がとてもインタラクティブであると同時に、とてもクリエイティブであるということ。私は他教科の授業を見学することがとても少なかったが、少し見ただけでとても感じた。また、授業中のアクティビティを生徒自身に決定させることもとても多かったように感じる。このような生徒主体の雰囲気はオーストラリア教育の「自由」というイメージを支えているのではないか。おそらく校舎に1歩足を踏み入れただけで、独特の雰囲気を感じる事が出来ると思う。また、先生が生徒を誉める時の誉め方が日本と比べて大胆だなあと感じた。生徒の考えを否定せずに、生徒の自尊心を育てる、ここにオーストラリア教育の魅力があると思う。</p>
C	<p>私が驚いたことは、子ども達の主体性や積極性、発言をする子や自分でやる事を決める子が多いこと。日本では先生の指示なしでは動けない子どもがほとんどのような気がする。しかし、オーストラリアの子ども達は自分で考え、決め、行動し、責任を持つ。このことが私は小学校教育で最も大事なことだと思っているので、今回はそれを体験することが出来て良かった。先生と生徒の距離、関係もとても良いと思った。休み時間にもスタッフルームや教室に座っているのではなく、先生も一緒になって遊ぶ。しかし、授業中はしっかり気を引き締め、叱るときは叱る、誉めるときはものすごく誉める。このメリハリも子どもにとっては必要だと思う。授業のときも、間違った意見が出たからといって否定するのではなく、「そういう意見もあるね」「Nice try!」と言って子どもを認める。自分も教師という立場になったら、そうしていきたいと思う。</p>
D	<p>特に違うなあと思ったのは、時間割、授業形態だった。日本の小学校は細かく授業と小休憩を挟むのに対し、オーストラリアでは長い1時限と長い休憩で構成されており、1時限の中で様々な教科を包括した学習を行っていた。授業形態としては、主要教科の一斉授業は無いに等しかった。先生が児童1人1人を見て回り、各自のウィークポイントを見つけて克服できるようにするといったスタイルが基本だった。ただ、午後の実技的授業やアフターリセスの学習ではクラスで授業をすることが多かった。モーニングティーは日本にない文化ではあるが、お菓子を食べている間は子ども達が外で遊べないので、みんなで色々話すにはいい機会であると思った。</p>
E	<p>子ども達のことを誉め、自尊心を小学校の段階でのばす大切さを強く感じた。教科の枠のハードルが低く、総合的に色々な面から1つのテーマにせまることで色々な見方が出来る子が育つと感じた。教師の専門性を高める大切さを強く感じた。子ども達のことを考え、授業プランを作れる力を高めていこうとする人でなければ、オーストラリアの小学校で教師をすることは難しいと思った。答えをひとつにせず、考えることを大切にしよう感じた。無理矢理1つのテーマや答えにもっていこうとすると子ども達も教師が求める答えを言うようになってしまうんだと思った。</p>

表5に示したQ3の回答より、「Q1 参加者が最も学びたいもの」のうち関心が高かった「2カ国の教育の相違点」について、参加者が何を学んだかのかが分かる。ここには、子どもたちの主体性や積極性、インタラクティブ、クリエイティブ、生徒主体の雰囲気、ほめ方、自尊心の伸ばし方、先生と生徒の距離、教師がメリハリをつけて指導すること、教師のあり方、時間割、授業形態、教科枠を超えた総合的な授業、答えを一つにしない指導、教師の専門性、双方の教育には良い面と悪い面の両面があること、など様々な回答が見られた。このことから、たった2週間ではあるが、参加者は教育現場で様々なことに気づき、多くのことを学んでいたと言える。

表6 Q4「オーストラリアの日本語教育について学んだこと」の回答

参加者	回 答
A	<p>日本では外国語教育と言えば英語だが、オーストラリアは様々な言語を選択することができ、その中の1つが日本語教育。日本語を学習する人が多いということを実習で感じる事が出来た。私の学校ではとても日本語教育に力を入れていて、日本には知らないことのない外国の日本語教育の様子を感じる事が出来た。また、日本語という言語だけでなく、日本という国の文化にみんな興味を持っていて、異文化教育という点で日本の文化が外国の子ども達に人気があると思った。今回学んだ事は逆に日本での英語教育に活かせると思った。</p>
B	<p>YEAR 1～12、さらに Kinder や Preschool でも日本語教育が行われており、とても進んでいるという印象をうけた。小学校では日本文化を中心に、中学校から文法を学んでいた。オーストラリアの日本語学習者はとても多いと聞いていたが、こんなにも学校で行われているのかと大変驚いた。今回の研修では、日本語の文法を教える機会はほとんどなく、文化を教えることが中心だった。文化を教えるということは、異文化を教える以上に難しいと実感したが、文化を教えるという喜びは何にも代えることは出来ないと思った。</p>
C	<p>日本の外国語教育との違いは、先生が堂々としていることだと思う。発音も完璧な日本語ではないが、子ども達にもっと日本語に触れてほしいという思いがすごく伝わってきた。あいさつ、返事もなるべく日本語を使うようにしていたので会話に重点を置いているようにも感じた。preschool から外国語に触れさせているのも良いと思った。小さい子には文化を教えて、言葉だけでないという方法も使える！と思った。単語の反復も多かった。色の名前も1回の授業で終わりではなく次の授業でも、1年前の授業でも先生が「これやったよね、覚えてる？」と声がけしていたのが印象的。子ども達もそういう単語は覚えている子が多かった。あとは体を動かし、ゲームを通じて日本語に触れることが多かった。文字の覚え方にも1つ1つ意味を持たせているのはユニークで、発音もセットだったのでビックリした。(例えば「は」はハッピーなど)</p>
D	<p>やはり異文化交流という観点から授業を行うため、ゲームが推奨された。ただ、学んだことを形として残すために、ひらがなを日本語のノートに綴ったりもした。子ども達も普段身近にない文化には積極的に、文字や発音をほめると繰り返して言ってくれるし、周りの子も触発されてクラス全体がとてもいい雰囲気になった。</p>
E	<p>文化に触れることを大切にしていると感じた。日本にまず興味を持ってもらうことが重要だと思った。ゲーム等を通して知らないうちに言葉を覚え、使えるように計画されているのがとても参考になった。日本のように書くことが重視で話せないと、英語がコミュニケーションの手段になることが出来ないと思う。学習した言語がコミュニケーションをより充実した手段となれるように会話を重視したカリキュラムにすることが大切だと思った。</p>

表6に示したQ4の回答から、「日本語教育＝日本語を教えること」という実習前のイメージが、実習後には「日本語そのものよりも文化を教えること」「異文化理解や異文化交流が中心であること」に変化したことが分かる。また、指導に当たる教員が完璧に日本語を話せなくても堂々と指導していること、ゲームや身体を使った楽しい指導方法、コミュニケーションを重視していること、子どもたちをよくほめること、一度きりではなく体系的に指導すること、などの教え方についての回答も多い。参加者は、日本語を指導する教員の授業を見たり、自分で教えたりしながら、「小学生に外国語を教えるという活動」がどのようなもので、どのように行ったら効果的なのかなどについて具体的に考えることができたのではないだろうか。



表7 Q5「ホームステイや生活を通して学んだこと」の回答

参加者	回 答
A	<p>まずオーストラリアの人の優しさをとても感じる事が出来た。単語しか言わなくても何を言おうとしているかを考えてくれるので上手く英語を使えなくても会話をすることが出来、様々な場面でゲストとしてもてなしてくれた。オーストラリアののんびりした空気はとても居心地が良くて、日本に帰っても「どうにかなる」といった心構えを忘れずに過ごして行きたい。また、ホームステイ先には子どもがいて、末っ子の私にとって自分より幼い子との触れ合いはとても新鮮でとても良い経験になった。残念ながら英語を使う場面が思ったよりも少なくて、英語力の向上をあまり感じる事が出来なかった。</p>
B	<p>オーストラリアの生活はとてもアクティブで、基本的に Outdoor。私は基本的に Indoor だったので、最初は少々とまどいがあったが、このオーストラリアで変わることが出来るように感じる。ホームステイに関して大切だと思うことは2つある。1つ目は話しまくることが出来る。ステイ先の家族は、話せば話すほど返してくれるし、どんどん絆を深めることが出来る。2つ目は遠慮をしないこと。遠慮しすぎるといことは何も良いことはない。自分の意見をハッキリ言うということもオーストラリアでは必要だと感じた。</p>
C	<p>私はステイ先に子どもが3人いたので、会話や行動のきっかけになってくれた。水不足が深刻な場所だったのですごく不安だったが、大丈夫だった。家族がとても親切で、具合が悪くなったときも心配してくれて嬉しかった。旅行に来るだけでは見ることのできないオーストラリアの習慣に触れることができて、とてもとても良かった。子ども達にもすごく助けられたし、やっぱり子どもと触れ合うのは楽しいと改めて思わせてくれた。メルボルンの人はとても親切だと聞いていたが、本当にとても親切にしてもらってビックリした。仕事の途中でも困っていると助けてくれたし、子ども達の親御さんも話しかけてきてくれて嬉しかった。2週間日本人のいない生活は大変だったがそれ以上に楽しい思い出でいっぱいだった。</p>
D	<p>一緒に生活する以上、英語をうまく話せないからといって会話から逃げるのは一番良くないことだと分かった。一度話し出せば家族も言葉を笑顔で返してくれるし、こっちが話終わるまで待ってもらえる。皿洗いでは文化の違いを感じた。自分の家では、シンクにお湯をはり、洗剤を入れ、その中で食器を洗い、水で流さずそのままタオルで拭くというものだった。Aussie はよく紅茶を飲んでいる。家ではモーニングティーと夕食の後と2回。学校でも先生方は休みの度に飲んでいて。</p>
E	<p>家族の時間の大切さを感じた。1人ひとりの時間やしたい事を尊重しつつ、家族で楽しむ時は一緒に楽しく過ごす姿がとても素敵だと思った。日本とは違う文化を学ぶことで日本の良さ、オーストラリアの良さを学び、自分の中に両者を取り入れる事が出来た。</p>

表7に示したQ5からは、英語でコミュニケーションすることについての回答が多く見られた。「英語をうまく話せないからといって会話から逃げるのは一番良くない」「上手く英語が使えなくても会話をすることができる」「話しまくる」「単語でも通じる」「遠慮しないで自分の意見をハッキリ言う」などである。これらの回答から、オーストラリア人と英語でコミュニケーションをする中で、参加者がそれぞれ苦労しながらも、失敗を恐れずに、積極的にコミュニケーションを取ろうとしていた様子が窺える。

その他に、生活習慣や行動スタイル、時間の使い方、などの「目に見えない」文化についての指摘もある。現地での生活や交流の中から、知識としての表面的な異文化理解から、さらに理解を深めつつあるのではないだろうか。

表8 Q6「この経験を今後どのように生かしたいか」の回答

参加者	コメント
A	<p>今回学んだ教育や社会についての知識は日本のものと比べられる良いものになると思う。その上で日本の教育や制度の良い点や悪い点を考えることが出来るようになった。語学の面ではコミュニケーションをとる上で大事なことは相手に伝えようとする気持ちと相手を分かろうとする気持ちで、それを色々な人に伝えたいと思う。オーストラリアの生活を通して学んだことはきちんと整理していることがいつも正しいとは限らず、ある程度の余裕を持つこともとても大事だということがよく分かったので、日本に帰ってもその気持ちを忘れずに、きちきちとし過ぎた生活ではなく、ある程度の余裕を持つとうと思った。</p>
B	<p>将来私は小学校教諭を目指している。また、2年後には小学校において英語教育が全体としてスタートする。それに伴って、私はその分野のスペシャリストになりたい。今回学んだオーストラリアの文化や教育の知識を活かして生徒に多文化について教えていきたい。オーストラリアの小学校で見たインタラクティブでアクティブな授業展開は日本の小学校で取り入れても大変興味深いと思う。日本の小学校で国際的な先生になれたらいいと思う。</p>
C	<p>小学校英語に興味があったが、先生は英語が話せないという意味がないと思っていた。小学校で実習をしてみて必ずしもそうではないと感じた。伝えよう、教えたい、という気持ちがあれば子ども達は受け取ってくれると分かった。小学生に英語を教えるときも無理をして難しい内容をやるのではなく、子どもに合ったやり方でゆっくりやっていけばいい。積極性も大事で、積極的に子ども達に話しかけると応えてくれるので日本でも積極的にいこうと思う。子どもの主体性、個性を大事にしたい。</p>
D	<p>オーストラリアでも日本でも子どもの本質、特にゲーム、誉められることが好きで「好きこそものの上手なれ」がよく当てはまると思ったので、今年度の教育実習で「誉めること」、期待していない回答にもフォローと「誉めること」を忘れないようにしたい。子どもと英語で会話することで、今まで聞いたことのない話し方を聞く機会をもてた。今後英語（英会話）の幅を広げる上で上手く活かしていきたい。オーストラリアの小学校教育の中で Show and tell などの授業内容、掲示の内容は驚くべきものであったので自分も取り入れていきたいと思う。</p>
E	<p>日本で一番外国籍の多い横浜の学校で勤務することが決まり、日本語を上手に使えない子どもも多く、国際理解教育も盛んであると聞いた。国際理解の授業では今回のオーストラリアのホームステイを含め、生活体験を子ども達に教え広め一緒に楽しみたい。日本語教育の面では、私も話したいけれど話せない気持ち、そのとき自分がどうしたか、どのようにコミュニケーションをしたか、という体験は子ども達の気持ちを理解する上で重要な体験をすることが出来たと思う。これから始まる英語教育にオーストラリアの日本語教育の授業がとても役立つと思う。自分の引き出しがたくさん増えた。</p>

表8に示したQ6より、Aは異文化体験から多くのことを学び、自らの行動や考え方を見つめなおしていることが分かる。BとCは英語活動のあり方や具体的な方法に関心が高く、小学校英語のスペシャリストになるという明確な目標を持ったようである。Dは、子どもはどこの国でも一緒であることに気づき、実習で学んだ指導方法やほめ方などを、3年次の教育実習でも活用したいと考えている。Eは4月から小学校教員になる。外国籍の子どもが多い学校での勤務が決まっており、今回の研修で得たことを授業や児童理解にすぐにも生かしたいと考えていることがわかる。

## 5. 4. まとめ

ここでは、Q1～Q6の回答をもとに、参加者が学んだことをまとめてみたい。

まず、参加者は、事前研修を通して、英語、教育、異文化理解を学びたいという目標を持って実習やホームステイに臨んだ。また、心理面では、新しい環境への適応力と柔軟性、失敗を恐れない積極性を身につけ、自分でやり遂げたという自信を持ちたいと望んでいた。

英語の面では、学校では子どもたちや教師と、ホームステイ先ではホストファミリーと、英語が上手く話せなくてもとにかく積極的にコミュニケーションをとろうとしていた。

教育の面では、学校や授業を通じて、オーストラリアの教育の目指すもの、自主性や積極性、答えが一つではない授業、インタラクティブな授業方法、考えを否定せずに自尊心を育てる方法、ほめ方など、具体的な指導方法を学ぶことができた。また、小学生に外国語を教えることはどのようなことかを再検討するとともに、子どもたちに日本の文化を伝えることの難しさや喜びを感じていた。

生活面では、オーストラリアと日本との習慣や考え方の違いに戸惑いながらも、お互いの文化を積極的に理解しようとしていたことが分かる。日本とは全く異なる環境に身を置くことで、柔軟性も身に付けたのではないだろうか。

研修を終え、実習やホームステイをやり遂げたという大きな自信を得ることができた。このことは、参加者の今後の学習や行動にも変化をもたらすのではないだろうか。

以上より、本研修のねらい(1)は、参加者が学校現場で多くのことを学んでいたことから、ねらい通りの充実した研修になったのではないだろうか。(2)については、将来教職に就こうとしている参加者にはぜひ実践してほしいと願っている。しかし、この経験は教職以外の仕事に就いても、多文化共生が進んでいく日本社会においては、十分に生かせるだろう。

今回の参加者は、海外も実習も初めての1年生から、海外で教師経験がある学生、オーストラリアに2度の短期滞在経験があるものまで多様であった。教師経験の有無、英語力の有無などに違いがあっても、参加者それぞれの視点から様々なことに気づき、考え、学んでいた。この研修で得たことを、次のステップにつなげていってほしい。

## 6. 研修の問題点と今後の課題

今回の研修は初めての企画であったため、いくつかの問題点があった。ここでは特に、渡航前に改善できることを中心に検討を行なう。

まず、参加者募集の説明会やオリエンテーションにおいて、現地での具体的な活動について学生に十分に伝えることができなかったことが反省点である。学生の不安を和らげ、参加しやすい雰囲気を作るためにも、研修の企画段階での現地事前調査が不可欠である。

また、学生に実習校やホームステイ先の情報を伝えるのが渡航直前になってしまったことも大きな課題である。オーストラリアでは12月から1月にかけて長期休暇に入り、約2カ月間、学校とは連絡が取れなくなってしまう。そのため、学校やホームステイの情報は、渡航直前にならないと入手できない。この点については、募集時期や参加者の専攻を早めるな

どして対処したい。

さらに、今回参加した1・2年生は、日本でも教育実習をしたことがないため、課題にした教案作成は難しかったようである。教室英語や子どもたちに教えるときに気をつけるべきこと、教室活動や教案の立て方などについて、指導・助言するような研修会を設けるなども必要であろう。

この他にも問題点はあるが、上記の点に改善を加え、現在、第2回目の研修を行っているところである。

今後、このような研修を行っていくためには、研修を大学の授業単位に認定してもらうことや参加費用を抑えるために大学が一部奨学金のような形で支援することについても検討を加え、多くの学生に参加しやすい形を模索していく必要がある。

最後に、参加者のうち1名は、本研修をきっかけに本学の協定校への長期派遣留学を決めた。2名は、短期派遣留学でアメリカに旅立つ。3週間という短い期間ではあったが、参加者は、海外に留学する、学校教員になる、という明確な目標をもち、次のステップへと踏み出している。たとえ短い期間であっても、海外での経験は学生に大きな影響を及ぼし、学生の視野を確実に広げているといえるだろう。今後も、学生の将来に役立つ有益な研修を企画し、短期海外研修プログラムの開発を続けていきたい。

## 付記

本研究は、特別研究経費プロジェクト「海外の教育機関におけるインターンシップ・プログラムの開発と実施―学校現場で国際理解教育が担当できる教員の養成を目指して―」（担当：佐々木ゆり・高橋亜紀子）の報告である。

## 参考文献

- 永井千賀子(2007)「第1回中国語海外短期語学研修実施報告―参加者が書いたアンケートとレポートを中心に―」『長崎大学留学生センター紀要』第15号
- 松本久美子(2007)「学生交流と大学の国際化―海外短期語学留学プログラム「第1回韓国語研修」を一例として―」『長崎大学留学生センター紀要』第15号
- 宮城教育大学国際理解教育研究センター(2009)『宮城教育大学小学校インターンシップ研修―オーストラリア編―報告書』
- 松村真樹(2007)「第1回オーストラリア短期英語研修：単位認定と海外体験学習の両立を目指して」『長崎大学留学生センター紀要』第15号
- 渡部留美(2009)「短期海外研修のプログラム作りと課題―大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告―」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第13号
- Department of Education, Employment and Workplace Relations (REEWR) (2007) *An investigation of the state and nature of languages in Australian schools [online]*. Commonwealth of Australia.  
<[http://www.dest.gov.au/sectors/school\\_education/publications\\_resources/profiles/documents/investigation\\_languages\\_in\\_schools\\_pdf.htm](http://www.dest.gov.au/sectors/school_education/publications_resources/profiles/documents/investigation_languages_in_schools_pdf.htm)>